

書 評

レグランド塚口淑子編著
『「スウェーデン・モデル」は有効かー持続可能な社会へむけて』

(ノルディック出版、海象社、2012年)

福島 淑彦

I はじめに

本書はスウェーデン社会のあり方（スウェーデン・モデル）を紹介する目的で書かれている。一般に、「スウェーデン・モデル」とは、経済成長と社会福祉の充実の両立を達成するためにスウェーデンで行われてきた様々な制度や政策のパッケージ（社会モデル）と理解されている。狭義には、「スウェーデン・モデル」は経済的側面にのみに注目して議論されるが、本書ではもう少し広い意味、つまり、「市民生活などを含むスウェーデン社会の在り方」を「スウェーデン・モデル」として議論が行われている。言い換えると、「スウェーデン・モデル」は“The Swedish Way”、「スウェーデン社会の在り方そのもの」を指すものとしている。その上で、編著者は、「本書を読むことによって、1990年代初頭のバブル経済崩壊後、停滞している日本社会がそこから脱出するためのヒントやサジェスションを読者が見出すことを願う」と記している。

本書の序論では、スウェーデン・モデルの特徴として、「積極的労働市場政策」、「高い労働者の組織率」、「団交による決定」、「普遍的福祉」、「全員が就労」、「インフレおよび失業率の抑制」、「労使協調路線」、「同一労働・同一賃金」などを挙げている。その上でこれらを実践に移すために、「連帯あるいは共生」、「平等主義」、「自律と自立」、「柔

軟性」、「コンセンサス・協調路線を好む実利主義」の理念・原則が大切であると強調している。以下では、はじめに本書の内容を要約し、その後、本書の論評を行う。

II 本書の概要

本書は、「スウェーデン・モデル」という共通テーマで各章が独立に執筆された10本の論文から構成されている。序章以外の全10章はいくつかの章ごとにまとめられ、小タイトルをつけてグループ分けされている。それは、(I) 福祉社会の背景にあるもの（第1章、第2章、第3章）、(II) 環境問題をどう捉えるか（第4章）、(III) 仕事と家庭両立のための理念と実践（第5章、第6章）、(IV) 家族関係と高齢者ケアの変遷（第7章、第8章）、(V) 住んでみたスウェーデン（第9章）、(VI) 数字で見るスウェーデン社会とジェンダー（第10章）、の6つのグループである。以下に、各章の要旨をまとめた。

(I) 福祉社会の背景にあるもの(第1章、第2章、第3章)

第1章「スウェーデン・モデルのルーツをたどる」では「スウェーデン・モデル」と呼ばれる現在の「スウェーデン社会の在り方」が、どのような歴史的経緯で形成されてきたのかについて議論されている。その中でも特に1928年に社民党党首のハンソ

ンによって唱えられた「国民の家 (Folkhem)」という政治理念、1938年に誕生した「サルトショーバツ協定 (Saltsjöbadsavtalet)」という労使間の協調的合意、の重要性を強調している。筆者はハンソンが打ち出した「差別がなく、平等と連帯により国民が一体となりうるよりよい市民の家としての理想的な国家である国民の家」という政治理念が、封建的で硬直した階級社会から近代国家への移行をスムーズにしたとしている。また、「サルトショーバツ協定 (Saltsjöbadsavtalet)」以降、労使間の問題解決はストライキや革命によらない協調的な話し合いによる解決方法となっていったと述べている。

第2章「スウェーデンの経済と経済政策－経済・福祉・環境の共生」では、経済不況に対する政策と経済成長に関する政策という観点から、スウェーデンの経済政策の特徴について、アメリカや日本を比較対象国として議論がなされている。特に、執筆分担者が強調しているのが、「積極的労働市場政策」の役割である。執筆分担者は「積極的労働市場政策」が女性の労働参加の増加、高い成長率の実現、低い失業率の達成に寄与してきたとしている。

第3章「スウェーデンの社会保障－理念・仕組み・財政」では、はじめにスウェーデンの社会保障制度がどのような歴史的経緯や理念によって形成されたのかについて考察がなされている。次に、社会保障に関する国民負担の国際比較を行うことで、スウェーデンの社会保障費関連支出が世界で最も高いことを示し、最後に、スウェーデンの年金制度、医療保障制度について詳細な分析を行っている。

(II) 環境問題をどう捉えるか (第4章)

第4章「環境問題への対応は『フォアキャスト』か、『バックキャスト』か」では、スウェーデンがこれまでどのように環境問題に取り組んできたのかについて議論されている。特に日本と比較することによってスウェーデンの環境問題に関する

取り組みがユニークであることを際立たせようとしている。1990年半ば以降のスウェーデンの環境問題に対する取り組みで特に強調しているのが、現在から将来を予測する「Forecast」方式ではなく、将来の目標から現在何をしなければならぬかを考える「バックキャスト」方式で環境問題が考えられている点である。「フォアキャスト」方式は「資源は無限」という前提で現状を延長・拡大していく考え方である。従って、経済活動を行う際に環境に関する配慮は存在しない。一方、「バックキャスト」方式では「資源は有限」という前提で、将来を見据えてそれぞれの途中時点でどのように社会があるべきかを考えて行動する方式である。

(III) 仕事と家庭両立のための理念と実践 (第5章、第6章)

第5章で「ワーク・ファミリー・バランスからみるスウェーデン・モデルの理念」は、ワーク・ファミリー・バランスが形成された際に、どのような目的或いは理念のもとに制度変更がなされてきたのか、先行研究をサーベイする形で考察が行われている。その中で、スウェーデン・モデルの理念は「自律」と「平等」であるとし、それらがワーク・ファミリー・バランス政策の中でどのように体现化されていったのかを、1930年代から1980年代までの期間を中心に検証している。

第6章「子育て家族のワーク・ファミリー・バランス－ジェンダーと子どもの視点からみたスウェーデンの実践」はワーク・ファミリー・バランスの中でも、特に育児と保育に関する様々な制度の内容について説明がなされている。具体的には、妊娠手当、育児休業手当、父親手当、一時介護手当などの出産・育児に関する制度、保育所、就学前学校、児童・子供手当などの保育に関する制度について議論されている。第6章で興味深いのは、ワーク・ファミリー・バランス政策を子どもの視点から考察している点である。

(Ⅳ) 家族関係と高齢者ケアの変遷 (第7章、第8章)

第7章「スウェーデン家族の変遷－変わるパートナーと親子の関係」では、スウェーデンにおけるパートナー（夫婦）との関係、親子関係について議論されている。スウェーデンでは1960年代に「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割分業が議論されるようになり、その後、「男も女も仕事・家庭に対して同等な権利と義務と可能性を持つこと」が男女平等のコンセプトとなっていく。その結果、夫婦関係の形として、婚姻婚、同棲カップル、同性カップルなど様々な形態が出現している。さらに、離婚や離別が頻繁に行われることや婚外子が増加した結果、親子関係の形態、家族形態、世帯形態も変化していることが論じられている。

第8章「高齢者ケアの過去・現在・未来」ではスウェーデンの高齢者福祉の過去、現状、未来についてデータを用いて議論されている。具体的には、高齢化の現状、2000年以降の高齢者福祉の状況、2006年以降の高齢者福祉分野での新たな制度やサービスの導入状況、情報公開、高齢者福祉の今後の課題・方向性について説明されている。

(Ⅴ) 住んでみたスウェーデン (第9章)

第9章「“高福祉社会は家族を解体させる”を検証する」では、スウェーデンで暮らす一市民が日々の生活の中で感じる教育、医療、税金、家族、育児、子育て、に対する意見が述べられている。言い換えると、生活者の視点から「スウェーデン・モデル」が論じられている。第9章での主張をまとめると、国と国民との間には強い信頼関係があるために、「スウェーデン・モデル」が機能しているということである。具体的には、国は安心のある生活を国民に提供する努力を続け、国民は自分の税金が有効に使われていることを信じて高額な税金を払っている、というのである。

(Ⅵ) 数字で見るスウェーデン社会とジェンダー (第10章)

第10章「数字で見るスウェーデン社会とジェンダー」では、はじめにジェンダー平等に関する法律の歴史的な流れ（年表）が示されている。次に、主にジェンダーに関する統計的数字、つまり人口動態、労働市場一般、政治及び公的部門、に関するデータが男女の比較という観点から列挙されている。人口動態に関するデータについては、人口増減の推移、スウェーデン生まれと外国生まれの人口比、独身と既婚・同棲の割合、子供の有無による分類、が示されている。労働市場関連のデータでは、男女の労働力率の推移、公的部門の男女の就業者数の推移、職種による分類、労働組合加入者の男女比較、に関するデータが示されている。政治及び公的部門に関しては、男女間の投票率比較、議会及び公的部門において高い地位にある男女の人数に関する比較、が行われている。

Ⅲ 本書の評価

冒頭で記したように、「本書はスウェーデン社会のあり方を紹介する目的で書かれている」と編著者は序論で記している。しかし、各章のタイトル及び6つにグループ分けされた各グループのタイトルからは、スウェーデン社会全体の在り方を俯瞰できるようなテーマ設定にはなっていないことがわかる。各章ではそれぞれスウェーデンのある特定の側面に着目して、他国と異なるスウェーデンの制度やスウェーデン人の行動様式・考え方が並列的に論じられている。評者がこのように感じるのは、本書のタイトルの一部であり、本書全体を貫く中心概念（Core Concept）である「スウェーデン・モデル」という概念に関して、各章の分担執筆者が共通の認識を共有していないからではないかと考える。つまり、各章の分担執筆者がそれぞれ異なった意味合いで「スウェーデン・モ

デル」という概念を使用しているということである。以下に各章でどのように「スウェーデン・モデル」を定義・使用しているのかをまとめた。

統計データの提示と説明に特化した第10章を除く第1章から第9章の中で、「スウェーデン・モデル」という概念に関して明確に定義、或いは言及しているのは、第5章、第8章、第9章のみである。第5章では、要約すると「スウェーデン・モデルとは、持続的経済成長と完全雇用野実現を目指した理念と政策の複合体であり、『スウェーデン・モデル』の理念は、「自律」と「平等」である。」としている。第8章では「高齢者ケアの分野における『スウェーデン・モデル』は、過去に確立された高齢者ケアシステムに満足することなく、すでに決定された高齢者ケア計画を現在切れ目無く展開し、そうした計画と連動させながら法律を制定し、将来に向けて新しい高齢者ケア計画やサービスを次々に展開すること(原文)」としている。第9章では「スウェーデン・モデルとは、経済の平等を実現することを通して、人と人との間に働く力関係やしがらみを解体することによって、それぞれ個の独立と尊厳を保証し、自由な人間同士の関係を再構築する仕組みである。これと併せて、スウェーデン・モデルの真髄は「ユニークさ」と「柔軟性」である。(原文)」としている。第5章、第8章、第9章以外の章では「スウェーデン・モデル」について明確に定義されていないが、文意から読み取れる各章での「スウェーデン・モデル」とは次の通りである。第1章では、「現在のスウェーデンの社会制度そのものがスウェーデン・モデルである。」、第2章及び第3章では「スウェーデン・モデルとは、経済の安定と成長を図るために行われた経済政策、社会政策そのもの、加えて、その結果生まれた様々な制度である。」、第4章では「緑の福祉国家の構築(エコロジカルに持続可能な社会の構築)のプロセスがスウェーデン・モデルである。」、第6章では「スウェーデンでの共働き家族のワーク・

ファミリー・バランスが実現されていく過程と現在の社会の状況がスウェーデン・モデルである。」、第7章では「婚姻以外にも社会に許容されているパートナーとの関係及びそれに伴う親子関係が存在し得る社会制度と現在のスウェーデンの状況がスウェーデン・モデルである」、としている。

以上まとめたように、各章での「スウェーデン・モデル」の意味するところはかなり幅が広い。本書を通じて読者は、現在のスウェーデンの制度やそれが構築された歴史的経緯については漠然と理解できるものの、「これがスウェーデン・モデルである」という明確なイメージを持つことができないのではないだろうか。確かに、本書の編著者は序論で「『スウェーデン・モデル』は“The Swedish Way”、『スウェーデン社会の在り方そのもの』を指す」としている。しかし、あまりに広い意味で定義してしまうと「現在のスウェーデン社会に関するすべてが、『スウェーデン・モデル』である。」ということになってしまう。仮に、「スウェーデン・モデル」を「スウェーデン社会の在り方そのもの」という広い意味で捉えるのであれば、本書が意味する「スウェーデン・モデル」の全体像をはじめに示し、各分担執筆者が意味する「スウェーデン・モデル」は全体の中のどの部分に該当するのかを明確にした上で各章の議論が行われないと、読者は混乱してしまう。

グローバル化の進展は国家間の経済相互依存度を高め、結果として経済変動のリスクを高めている。1997年のアジア通貨危機、2000年初頭の米国ITバブルの崩壊、2008年のリーマン・ショック、2009年のギリシャ経済危機、などの事例が国際的な景気変動の連鎖が強くなっていることを示している。そのような環境下で、小国であるスウェーデンがヨーロッパ諸国の中でも高い成長率、低い失業率、高い生活満足度を維持・達成してきたことは驚きであり、ここに「スウェーデン・モデル」の本質が存在するように評者は考える。

本書の執筆分担者がもう一段高い視点で「スウェーデン・モデル」を俯瞰的に議論することができていれば、読者は「スウェーデン・モデル」についてより明確なイメージを持ち得たのではないか

と評者は考える。

(ふくしま・よしひこ 早稲田大学教授)